

高等教育機関におけるアフーマティブ・アクション実施をめぐる一考察

—— カリフォルニア州住民提案209号を中心に ——

竹 内 裕 子

序

本稿は1950、60年代の公民権運動を経て、1964年公民権法によってもたらされたアフーマティブ・アクションと教育における「多様性」との関連を議論するものである。アフーマティブ・アクションは、マイノリティーや女性を雇用、契約、教育などにおいて優遇する措置であり、アフーマティブ・アクションが多くのマイノリティーや女性に雇用、教育の機会を与えたと評価されてきた。しかしながら、アフーマティブ・アクションの実施自体や、実際にどのように実施するのかに関する議論が「非公式」ながら継続してきた。そして、1996年11月カリフォルニア州において「州と公共団体による差別と優遇措置の禁止」が住民提案209号（Proposition 209）として州住民に問われることにより、この議論が「公式の場」に持ち込まれることとなった。そして投票の結果賛成54.6%、反対45.4%で可決され、カリフォルニア州におけるアフーマティブ・アクションの廃止が決定した。

アフーマティブ・アクションに関しては、法律、教育、経済、社会などの側面から多くの研究があり多様な文献がある。大塚はアフリカ系アメリカ人のおかれている経済状況や貧困と差別の存在するアメリカ社会の社会的枠組みを指摘している（大塚1992：190-194）、しかし、アフーマティブ・アクションを人種差別との関係にお

いて位置づけるに留まっている。野口はアフーマティブ・アクションの実施とカリフォルニア大学の入学許可方針を取り上げ、入学選考方法の変更によりカリフォルニア大学バークレー校の新入生の人種別内訳がどのように変化したのかを論じている。1986年は黒人11.6%、ヒスパニック系16.6%、アジア系17.3%、白人44.7%であったが、1991年には、黒人は7.8%へと減少、ヒスパニック系は20.8%へと増加、アジア系は29.2%へと大幅に増加、白人は32.1%へと大幅に減少している。そして、1994年には黒人は6.4%へと更に減少、ヒスパニック系は15.8%へと減少、アジア系は36.7%へと増加、白人は33.9%へと多少の増加となっている。野口は「数字の上だけ見るとアジア系が増加した分白人が減少し、アフリカ系とヒスパニック系が同じパイを争っているように見える」と、入学問題が複雑な人種間の葛藤を抱え込んでいるとする（野口1996：45-48）。しかし、この論文はカリフォルニア大学におけるアフーマティブ・アクション論争の研究で、1995年のカリフォルニア大学理事会のアフーマティブ・アクション廃止の決定直後を扱ったものであり、本稿で取り上げる住民提案209号が問題となる時期までの言及はない。山内は法的側面からアフーマティブ・アクション判決の最近の動向を探り、マイノリティー統合のためのシステムとしてのアフーマティブ・アクションの必要性を述べながらも、法的にはマイノリティーを対象とするアフーマティブ・アクション

ョンの実施が困難になってきている現状を示唆しているが（山内1998：207）、1996年以降のアファーマティブ・アクションの議論には触れていない。本稿はこれらの研究以降のアファーマティブ・アクション論争を扱い、その可決がアファーマティブ・アクション実施の転機となったと評価される住民提案209号を通して、アファーマティブ・アクションの実施と「多様性」に関する議論を試みるものである。

次節では、住民提案209号を発議させる土壌を作り、カリフォルニア州住民が住民提案209号の是非を判断する上で大きな影響を与えたと考えられるカリフォルニア州におけるアファーマティブ・アクションに関連の2つの決定について概観し、第2節で、サンフランシスコ・ベイ・エリアの高校・大学に所属する学生を中心とするグループStudents for Affirmative Actionの活動を通して、大学キャンパスなどにおいてどのような議論がなされたのかを整理する。そして、第3節で反アファーマティブ・アクションの動きのなか、高等教育における「多様性」の追求がどのように模索されているのかを検討する。

1. カリフォルニア州におけるアファーマティブ・アクションの議論

ー住民提案187号と

カリフォルニア大学理事会決定ー「ゴールデン・ステイト（Golden State）」と称されてきたカリフォルニア州はアメリカ合衆国50州において最大の人口3千万人以上を抱え、1990年センサスによれば人種内訳は白人69.1%、アフリカ系アメリカ人7.4%、ネイティブ・アメリカン、エスキモー、アレウト0.8%、アジア系、太平洋諸島民9.6%、その他13.1%であり、これまで多様なエスニック・グループを受け入れてきた。

しかし、1994年11月8日非合法移民に対

する福祉受給を規制する住民提案187号（Proposition 187）の是非がカリフォルニア州住民に問われ賛成58.5%、反対41.2%で可決され、カリフォルニア州における大きな変化をもたらした。「州を救う（Save Our State, SOS）提案」と支持者から呼ばれたこの提案は、カリフォルニア州が大規模な移民の受け入れを実施してきたことに対する州住民の賛否を反映すると評され、ヒスパニック系移民の急激な増加をカリフォルニア州住民が危機的状況と判断したことの表われであった。

次に、翌年1995年7月20日、カリフォルニア大学理事会はカリフォルニア大学9つのキャンパスにおける人種を考慮した入学措置の廃止を決定する。カリフォルニア州はカリフォルニア州立大学システムのもとでの22のキャンパス、カリフォルニア大学システムのもとでの9のキャンパス、そして州内のコミュニティ・カレッジとの徹底したネットワークにより、すべてのカリフォルニア住民に高等教育の機会を与えるパイオニアでありつづけ（Wood and Valenzuela 1997：81）、アメリカ合衆国の高等教育機関をリードする存在であった。そのようなカリフォルニア大学の理事会において「アファーマティブ・アクション廃止」という決定がなされたことにより、全米の高等教育機関関係者、カリフォルニアの教育機関で学ぶ高校生・大学生らは衝撃を受けた。この決定は入学者の選抜、教員の雇用など教育に関するアファーマティブ・アクションをどのように実施するかについて新たな判断を示すものであり、高等教育機関における入学措置に関して連邦最高裁の判断が注目を浴びた1978年「バッキ対カリフォルニア大学理事会（Bakke vs. Regents of the University of California）」の「大学において学生集団の中に多様性を確保するために入学者選抜の過程で人種を1つの要素として考慮することを適当とする」判断とは異なるものである。

そして、カリフォルニア大学理事会がアファーマティブ・アクションの廃止を決定した翌月1995年8月、1996年11月の投票日に向けてカリフォルニア公民権発議(California Civil Rights Initiative, CCRI)が州の法務長官に提出される¹⁾。これは「州は雇用、教育、契約の実施に際していかなる個人、集団に対し、人種・性別・肌の色・エスニシティ・出生国により差別あるいは優遇する扱いをしてはならない」²⁾というものであり、カリフォルニア州で「再度」、雇用、契約、教育を包括したアファーマティブ・アクションの是非が問われることになるのである。「再度」というのは、この提案がはじめて提出されたのは1993年でありその際には発議に必要な署名が集められず、失敗に終わっているからである。この失敗の後に、カリフォルニア州では1994年住民提案187号が可決し、カリフォルニア大学理事会がカリフォルニア大学システムにおけるアファーマティブ・アクションの廃止を決定する。1993年以降カリフォルニア州ではアファーマティブ・アクションの是非を問う上記の提案や決定がなされており、これらの動きはカリフォルニア公民権発議の発議、そして可決に向わせる強い推進力になったと考えられる。

カリフォルニア公民権発議キャンペーンは、発議のために必要な署名集めが開始され、1996年2月21日までにカリフォルニア州の投票人による69万4千以上の署名が必要とされた。このキャンペーンはClaremont Instituteの総長であったラリー・アーンを会長にキャンペーンがはじめられるが、10月には資金難に陥り署名集めを中断せざる終えなくなる。そこで会長職にあったラリー・アーンは辞職し、ワード・コーナリーがその職を引き継ぎキャンペーン資金を募り、1996年2月100万を越える十分な署名を集め終わる。ワード・コーナリーはカリフォルニア大学理事会のメンバーの一人でアフリカ系アメリカ人実業家であり、

カリフォルニア大学におけるアファーマティブ・アクションの廃止を呼びかけ決定に導いた人物である。コーナリーがその職に就くことで、アフリカ系アメリカ人にとってもアファーマティブ・アクションは必要ではなく、人種差別に反対しながらもアファーマティブ・アクションに反対するのだというアピールとなり、カリフォルニア公民権発議支持キャンペーンは有利になったといえる。7月には、カリフォルニア公民権発議は住民提案209号という番号を与えられ11月の投票日を迎えるのである。

11月5日の投票の結果、賛成54.6%、反対45.4%で住民提案209号は可決された。反対票の内分けは男女別では、男性39%、女性52%と大きな差が見られ、人種・エスニシティ別には76%のラテン系アメリカ人、74%のアフリカ系アメリカ人、61%のアジア系アメリカ人が反対票を投じている(Los Angeles Times 1996: A1)。この結果からより多くの白人男性が「差別・優遇措置」の廃止に賛成であったことが分かる。

2. サンフランシスコ・ベイ・エリアにおける動向

1996年11月カリフォルニア公民権発議の是非が問われる投票日まで、サンフランシスコ・ベイ・エリアでは発議に反対する活動がみられた。本節では具体的状況を浮かび上がらせるために筆者が関わった1つのグループの事例を紹介する。筆者は1995年8月以降サンフランシスコ・ベイ・エリアに位置する大学のキャンパスにおいてフィールド・ワークを実施し、アファーマティブ・アクションを擁護する立場に立つ大学生、高校生を中心とするグループ、Students for Affirmative Actionの活動を追った。

(a) Students for Affirmative Action

このグループは1995年夏にカリフォルニア州全域において結成された学生と政治活動家をメンバーとする団体であり、メンバーはサンフランシスコ・ベイ・エリアにあるA大学とB大学に所属する大学生とサンフランシスコ市近郊の高校に通う高校生である。中心メンバーは12人、男性5、女性7で、エスニック構成は白人3人、ラテン系アメリカ人3人、フィリピン系アメリカ人3人、アフリカ系アメリカ人3人である。年齢は1995年当時で16歳から23歳であった。その他のメンバーはベイ・エリアの大学を卒業した後、近隣の高校で非常勤の教員を務める27歳のアフリカ系アメリカ人女性や、政治活動家で職業は看護婦である48歳の女性なども含まれている。

A大学キャンパスで活動するグループは多く、ラテン系、アジア系、アフリカ系などのエスニック・グループごとのグループ、キャンパスにおける多様性を求め、エスニック構成の異なったメンバーで活動するグループ、ゲイ・レズビアン・グループなどが存在する。筆者がStudents for Affirmative Actionの活動を追うようになったきっかけは彼らがアファーマティブ・アクションに関する集会を開催するという情報を得、集会前日にラテン系アメリカ人のメンバーの一人から、この集会への参加を熱心に誘われたからである。集会に数回参加した後筆者は、ビラ配り、デモンストレーションへの参加と行動をともにするようになった。

(b) Students for Affirmative Actionの活動とキャンパスでのアファーマティブ・アクション論争

彼らの主張のテーマは時間の流れ、選挙キャンペーンの進行とともに変化していく。1995年8月から数ヶ月は1994年に可決された住民提案187号の実施取り消しとカリフォルニア大学理事会のアファーマティブ・アクション廃止決定の撤回を求め、同時に

カリフォルニア州において反アファーマティブ・アクションの動きが進行中であり、この動きがいかに危機的なものであるかを訴えている。

1995年の秋学期新入生を迎えて2ヶ月、1995年10月10日、彼らはA大学キャンパス内にある寮のラウンジでアファーマティブ・アクションについて考える集会を持つ。午後7時30分からはじまった集会にはアファーマティブ・アクションの議論に関心のある学生、アファーマティブ・アクションについてもっと知りたいという大学1年、2年生が中心の26名の学生が集まった。Students for Affirmative Actionのメンバーは、この日の集会のために以下のプログラムを掲げている。1. カリフォルニア大学理事会のアファーマティブ・アクション廃止決定を無効にすること。2. カリフォルニア公民権発議 (CCRI) を挫折させること。3. 住民提案187号の施行を阻止すること。(集会時配布資料1995年10月10日)である。彼らはカリフォルニア州で1994、1995年に可決されたアファーマティブ・アクションに関連する2つの決定、住民提案187号の可決とカリフォルニア大学理事会の決定は、カリフォルニア州における反アファーマティブ・アクションの動きであることを説明し、そして、アファーマティブ・アクションの必要性、アファーマティブ・アクション存続の運動をこのキャンパスから行なうことの重要性を訴えている。

Students for Affirmative Action主催の同様の集会は11月2日午後9時から、そして、9日午後9時30分からも行なわれたが、参加者は激減し11月2日は、Students for Affirmative Actionのメンバー4人を含めた男性3人、女性7人の10人、11月9日はメンバーのみ男性2人、女性4人の6人となり、グループの活動は継続するがこの集会からは新たなメンバーを獲得することはできなかった。グループのメンバーとして活動を続けることは週に2日以上、数時間

ずつを活動の時間に当てる必要がある。学期中の授業への出席や試験などに加えて、このような活動に関わることは多くの学生にとって困難であることが新メンバーの獲得を難しくする1つの原因であると思われ、キャンパス内での抗議運動を盛り上げる大きなきっかけをつくり出すことはできなかったと考えられる。

A大学キャンパス内で無料で配布される大学新聞は1995年9月以降、アファーマティブ・アクション関連の記事、大学内で行なわれたイベント・集会に関する情報を掲載している。11月14、16、21日は3回にわたるアファーマティブ・アクション関連記事を集めている。14日は「アファーマティブ・アクションと事実 (Facts)」、16日は「アファーマティブ・アクションと感情 (Feelings)」、21日は「アファーマティブ・アクションと未来 (Future)」である。14日の記事ではカリフォルニア州立大学システム下でのマイノリティー学生数の増加の事実を述べた上で人種・民族的多様性実現のために大学教員をいかなる基準で雇用するかが大きな課題となり、現状は教員の人種・民族的多様性は学生の多様性を反映しておらず、達成までの道のりの遠さが記されている。21日には学生たちのアファーマティブ・アクションへの反応を取り上げ「差別かどうかは別にして、公平ではない」と感じている白人学生のアファーマティブ・アクションに対する態度やカリフォルニア大学理事会の決定、カリフォルニア公民権発議が提出されたことにより、キャンパスで行動をはじめている学生グループの活動を紹介している。この号では、1面上段4分の1ほどに、Students for Affirmative Actionの11月9日の集会の様子の写真が掲載されている。前述したようにこの集会にはメンバー6人が集まっただけで、「戦いに誰も集まらないのに、アファーマティブ・アクションがなぜ最も重要なトピックなのだろうか？」というキャプシ

ョンがつけられている。26日には「合衆国は平等と戦っている」としてアファーマティブ・アクションが一部のマイノリティーの間でもフラストレーションを感じさせるものとなっていることを述べ、「優遇措置」の是非や多様性達成のための措置をめぐる議論がアファーマティブ・アクションの将来に関わるとし、キャンパスにおいてもアファーマティブ・アクションの話題が多く見られるようになる。

(c) キャンパスにおけるカリフォルニア公民権発議反対キャンペーン

1996年の冬学期がはじまり、カリフォルニア公民権発議を発議するのに必要な署名が順調に集められた2月末頃には、11月の投票日にむけてこの発議に反対するアピールがはじまる。この間にもキャンパスではカリフォルニア大学システム、カリフォルニア州立大学システムのもとで決定される奨学金受給、授業料の値上げ、財政援助の見直しなど学生生活に直接関わる問題が、アファーマティブ・アクションの実施とあわせて議論され、カリフォルニア公民権発議とともに取り上げられている。3月には大学自治会メンバーを選ぶ選挙が実施され、そのキャンペーン中候補者と同じフラタニティーに所属する白人学生が、ラテン系アメリカ人学生に暴力を振るう、蔑称で呼ぶ、などの事件が発生し、人種差別主義を支持するグループがラテン系で人種差別主義に反対する学生を襲った事件として取り上げられた。この事件は大学新聞でも扱われ、人種・民族的に多様であるA大学において存在するヘイト・クライムの事例として一部の学生に受け取られたことから選挙キャンペーンの1つの争点となった。

4月初旬、2人の警官がトラックの荷台に乗っていたラテン系男性を荷台から引きずり下ろし、殴る蹴るの暴行を加えているところがニュース番組などで放映され、警官による暴力行為の実態が大きくとりだた

された。このような移民に対する行為をStudents for Affirmative Actionのメンバーたちは人種差別と移民に対する攻撃と捉え、集会において1994年に可決された住民提案187号とあわせてその事件を学生に知らせている。

(d)組織化へむけて：他集団との連携の困難さ

1996年2月29日(木) A大学キャンパスではNOW(全米女性組織、National Organization of Women)会長のパトリシア・アイアランド、黒人研究を専門とする学者、A大学学生、ネイティブ・アメリカン活動家、NOWメンバーの5人によるパネルディスカッションが行なわれた。アイアランドはアフーマティブ・アクションを擁護し、カリフォルニア公民権発議の反対を表明し、4月14日(日)にサンフランシスコ市内で行なわれる予定の抗議行進への参加と支持を訴えた。そのディスカッションの後、NOWが主催する抗議行進に多くの参加者を動員し、行進を成功させるためのワークショップが行なわれた。このワークショップには40名を越える学生、大学教員、NOWのメンバーが集まり抗議行進への参加者をいかにして集めるかを話し合った。NOWメンバーの指揮の下、学生たちが近隣の大学、高校、教会、コミュニティーに呼びかけることとなった。このワークショップに出席していた学生のほとんどは既に何らかの団体において活動をしている者ばかりで、既に接触のある組織への呼びかけが確認され、より多くの参加者の動員が求められた。

3月7日(火)午後3時から学生会館内で学生とNOWのメンバー20名が集まって、4月14日の抗議行進に向けてのミーティングを行なわれた。いかに大学生の参加を呼びかけ、組織化した上で抗議行進に参加するかという議論がはじめられたが、この抗議運動に最初に掲げる内容がそれぞれ異な

っていた。Students for Affirmative Actionは即時に要求を聞き入れさせるために、方法を選ばない抗議行動をとる必要性を訴えたが、他の学生グループは、平等や女性差別の撤廃を求めることを抗議行動でまずアピールすることを目指していた。このような戦略と掲げる内容の相違は効果的な組織化を妨げることとなり、それぞれのグループがそれぞれ異なった利益を求めて活動を行なっている現状において、学生組織の間の連携が困難であることを証明するするものであった。NOWのメンバーはその場は諫めることができたが、3月16日(土)の3回目のミーティング、20名の参加者があったが、抗議行進において何を第一に呼びかけるかという前回と同じ議論がまとまらなかったために、大学内での学生の組織化は実現せず、学生たちはそれぞれが所属する組織において4月の行進に参加することになる。NOWの企画では、20人以上のグループは公式団体として登録され行進に参加できるようになっており、A大学キャンパスからまとまった団体として抗議行進に参加することでサンフランシスコ・ベイ・エリアにおける学生運動の盛り上がりを知らしめ、カリフォルニア州におけるアフーマティブ・アクションの必要性を訴えることができると考えていたStudents for Affirmative Actionのメンバーたちは、大規模な学生の組織化が実現しなかったことへの憤りを感じながら、学生団体組織の1つとしてこの行進に参加した。

(e)キャンパスにおける選挙キャンペーン

Students for Affirmative Actionの活動は住民提案187号、カリフォルニア大学理事会決定、住民提案209号などとカリフォルニア州で継続して起こった反アフーマティブ・アクションの動きへの抗議であり、カリフォルニア州で進行中の議論がいかに自分たち学生に関わりのあるものであるかを一般の学生に認識させるためのものであ

った。それにより学生たちに直接関連のある事項、奨学金、授業料、財政援助などがカリフォルニア公民権発議などの反アファーマティブ・アクションの動きによりどのように取り扱われるのかについての議論を行なうきっかけを作り出していたと言える。しかしながら、大学のキャンパスにおいて組織的な運動を盛り上げることはできず、その組織力は弱いものであった。そして日々起こる人種、エスニック・グループなどの相違から発生するヘイト・クライムから、現実に残存するマイノリティーや女性に対する差別の事実を取り上げることにより、アファーマティブ・アクションの必要性を訴えたが、彼らの活動の効果は現れず、住民提案209号は可決される結果に終わる。

3. 住民提案209号がもたらしたもの

ーアファーマティブ・アクションと

高等教育の行方ー

住民提案209号の可決を受けて大学などの高等教育機関は「教育の質と学生の多様性」をいかに保つか苦慮しながらアファーマティブ・アクションの実施の見直し、廃止を決定せざるおえないという状況にある。高等教育において多様性を追求する理由に関しては以下の議論がありジョン・ハワードは歴史的視点からアファーマティブ・アクションを検討し、公民権運動や公民権獲得に関する経緯を述べた上で、アファーマティブ・アクションがどのように実施されるようになったかについて書いている。これは最初、義務としてアフリカ系アメリカ人や他のマイノリティーを主流社会に導くことを推進する措置であり、「多様性、それ自体が正当で、価値のある目的である」ことを擁護するものであった。学生たちは将来、より人種・民族的多様性に富んだ社会に生きることになるのであるから、学校というものをより適切に多様性に富んだ集団とすることは教育の使命の一環であると

考えられてきたのである(Howard 1997: 32)。同様に「教室における多様性は教育の質を向上させ、他人をよく知ることとは卒業した後の生活のための準備である(Flores and Slocum 1997: 92)。」、「アファーマティブ・アクション政策の1つの結果は、今日より多くの機関が、学生集団、教員、職員の間の多様性を保持することが教育的価値であることを認めていることである(Hurtado and Navia 1997: 124)。」というようにアメリカ社会が多様性に富んでいるために、その準備期間としての「多様性のある教育の現場」が高等教育機関の有るべき姿と考えられているのである。

この「多様性の追求」の議論は反アファーマティブ・アクションの動きが見られる現在でも継続しており、1998年10月29日付の*Black Issues in Higher Education*には大学キャンパスにおける多様性に関して一般の人々に質問したアンケート結果を掲載している。その記事によれば回答者の71%が「多様性のある教育が社会統合をもたらし、社会が分裂するのを防ぐ。」と答えている。加えて、91%が「我々の社会は多文化的で、より我々がお互いを知れば、より我々はいまよりうまくやっていける。」という項目に賛成している(Chenoweth 1998: 12)。

教育関連の雑誌にはカリフォルニア州等で入学者選考の際の優遇措置が廃止された結果、その後いくつかの大学において入学者数のエスニック・グループ別の割合がどのように変化したかが盛んに取り上げられ、多くの場合アフリカ系アメリカ人などのマイノリティーの学生数の減少が大学におけるアファーマティブ・アクションの廃止の問題点として取り上げられている。1999年7月5日付『タイム』紙には、「カリフォルニアにおいてマイノリティーの学生がトップスクールから閉め出されている。」という見出しで、学生にとって好ましいことなのかと書いている。そしてカリフォルニアにおけるアファーマティブ・アクション

廃止への一連の動きを「すべてのカリフォルニア大学システムにおいてエスニック・グループの多様性が次々と失われている」とし、1999年度の秋学期入学人数の9%がヒスパニック系、3%がアフリカ系（州における割合は29%ヒスパニック系、7%アフリカ系である。）であると続け、このような状況は学生が卒業後生きていく多様性のある社会と同様の多様性のある環境で学ぶ機会を奪っていると記している（Irvine 1999：30-33）。

しかしながら、ここで取り上げられている「多様性」とはどのようなものであろうか。高等教育機関、大学の目指す「多様性」はどのようなものなのか。先程挙げたアンケートの結果から「多様性」という言葉の意味を回答者が異なって理解していることが分かる。回答者の半分が多様性の意味を異なったエスニシティ、人種、国籍、あるいは文化とし、18%の回答者はそれを異なった思想や考えを持つ人々と定義し、12%は異なった社会的地位、あるいは経済的そして教育レベルとする。8%は異なった宗教的背景を持つ人々としている（Chenoweth 1998：12）。

このような相違が存在する中で高等教育機関では、多様性達成のための新たな基準が求められている。これまでは「多様性」達成のためにアフーマティブ・アクション、人種・性別・エスニック・グループ・出身国などを考慮した優遇措置が実施されてきた。しかし、アフーマティブ・アクション廃止を求める人々の議論は、これは「多様性」を求めるという理由で人種・性別等を考慮するすりかえ議論だとし、人種・性別・肌の色等を考慮しない（Color-blindness）の基準こそが平等・公平であるというものである。U. S. News & World Reportの編集長を務めるザッカーマンはアフーマティブ・アクションを「1つのより良く意図された誤った政府のプログラムである」という書き出しで、優

遇措置を批判し、アフーマティブ・アクションを廃止する時が来ているとする。彼は1970年代に機会を与えることと、肌の色を考慮しないという基準が、多様性追求主義に取ってかわられたと優遇措置をめぐる問題の所在を述べ、アフーマティブ・アクションがアメリカ史の流れに反しているとする。「世代を追うごとにポットの中に溶け込んでいるところに、なぜそれを分離させ、優遇措置を主張するのか」と彼は問うているのである（Zuckerman 1999：88）。そして、1998年新たにカリフォルニア州知事となったグレイ・デイビスのもとで、カリフォルニア大学は新しい試みを実施している。それは「4%解決（The 4% Solution）」という、カリフォルニア州にあるすべての高校のトップ4%の学生を一連の大学準備コースを習得している場合に限り自動的にカリフォルニア大学に受け入れるというものである。これは人種・エスニック・グループ別に居住地区が異なることに着目し、様々な地区にある高校から上位の者を入学させることによりアフーマティブ・アクションを実施せずに人種的多様性を達成するための高校ランキング法であり、1999年秋学期のカリフォルニア大学バークレー校への新入学生は4999名でエスニシティ別の内訳はネイティブ・アメリカン0.6%（29名）、アジア系41.0%（2039名）、アフリカ系アメリカ人3.7%（183名）、ヒスパニック系9.5%（477名）、白人33.9%（1697名）、その他1.9%（94名）であった。カリフォルニア大学理事会がアフーマティブ・アクションを廃止する以前の1994年秋学期の新入学生数と比べてみると、アフリカ系（1994年6.2%）、ヒスパニック系（1994年14.9%）が大幅に減少し、アジア系（1994年37.9%）が増加している（カリフォルニア大学バークレー校ホームページ）。数字だけでみると、アフーマティブ・アクション実施時よりマイノリティーの数は減少し、この方法での人種的多

様性は達成されていない。

この高校ランキング法はカリフォルニア州以外でも既に実施され、テキサス州では1997年の連邦控訴裁判所の大学入学者選考の際のアファーマティブ・アクション廃止の判断により、トップ10%を受け入れる方針を打ち立てている。ワシントン州でも1998年にアファーマティブ・アクションが廃止され、ワシントン大学でもカリフォルニアと同様の方針を検討したが、マイノリティーの学生の入学を増加させることが困難だという理由で実施を見合わせた（Gorman 1999：774-775）。そして、フロリダ州ではフロリダ州立大学と、フロリダ大学の2校を除いた上で、州内にあるすべての高校のトップ20%を受け入れることがジェブ・ブッシュ知事のもとで提案されている（Dervarics 1999：7）。アファーマティブ・アクションの是非を住民提案で問う州では、このように高等教育機関・大学への入学者の選考に関して以上のような方針を打ち立てている。しかし、この方針に対して教育の質が低下するのではないかという危惧や、この方針によってより多くのマイノリティーを入学させるという多様性が実現するのかといった議論もある。

アファーマティブ・アクションをめぐる議論のなかでアファーマティブ・アクションがもたらすとされる「多様性」はその実施にあたりどのような多様性を、どのように達成するかが論点となり、それらが「アファーマティブ・アクションの是非」として現在問われているように思われる。カリフォルニア州ではカリフォルニア大学理事会のアファーマティブ・アクション廃止決定と住民提案209号への反駁が継続し、カリフォルニア州ではじまった議論は他州においても議論されはじめている。

結 語

カリフォルニア州におけるカリフォルニ

ア公民権発議の提出はアメリカ合衆国においてアファーマティブ・アクションを公式の場で議論する機会を与えたものであり、雇用、教育、契約という多岐にわたる実施が現在議論の対象である。本稿ではカリフォルニア公民権発議後の住民提案209号の提出にいたるカリフォルニア州の状況に触れた上で、住民提案209号の選挙キャンペーンが行われていた時期の大学生らの活動からカリフォルニアに大学のキャンパスで何が議論されていたのかを紹介した。そして「多様性」を追求してきたアメリカの高等教育機関において反アファーマティブ・アクションの動きがある中でどのような議論がなされているのかを検討した。

住民提案209号可決後の経過は、まず投票日、可決されたその日に北カリフォルニア合衆国地方裁判所に控訴され、12月23日地方裁判所首席判事は州法としてのその施行に予備的禁止命令を出す、1997年4月第9連邦上訴裁判所は住民提案209号を合憲と判断する。11月3日連邦裁判所が施行阻止請求を審理しないと判断したことにより、カリフォルニア公民権発議はカリフォルニア州法第1条権利宣言第31節として成立する。そして、1998年ワシントン州において、住民提案209号と同内容の住民提案が発議され投票の結果賛成58.22%、反対41.78%で可決し、発議にはいたっていないが、1999年フロリダ州においても契約に限ってのみ「差別と優遇措置を禁止する」提案が提出された。

教育機関はアファーマティブ・アクションを廃止、あるいは修正する中で新たなプログラムを模索している。実際にその廃止、修正により大学入学者数等、エスニック構成等が大幅に変化している機関もある。「多様性」を求める機関はどのようにその多様性を達成するかに関して新しい基準が求められている。ジュリアス・ウィルソンは成功のための基準として、より柔軟性のある実力をもとにした（merit-base）基準

を提案している。これは単にSAT (Scholastic Aptitude Test) などの試験を廃止することではなく、実際にカリフォルニア大学アーバイン校が実施している志願者のリーダーシップ、個人的な困難を乗り越える能力、自己意識、公的・文化的意識、報奨や賞、特別な知識を考慮するなどの基準の導入である。ウィルソンはこのような政策を「機会の肯定 (Affirming Opportunity)」と呼び、これが収入、人種、その他の要因に関わらず、すべてのアメリカ人があてはまる国を挙げての関わり (取り組み) を新しくするものであるとしている (Wilson 1999: 61-64)。

以上のように、カリフォルニア州ではじまった「差別と優遇措置」の禁止を求める住民提案を機にアファーマティブ・アクションの実施、多様性の追求に関する議論はアファーマティブ・アクション以外の方法により多様性を達成する方向に向かっているといえる。しかしながら、実際は意図する「多様性」は達成できていないのが現実である。今後も「多様なアメリカ」のあり方が問われ続けるであろう。

註

- 1) 直接イニシアティブとは州憲法の改正や修正、または州法令の改正や修正が住民の一定割合の署名を集めた請願によって提案され、議会による関与が何もないままで、直接有権者に賛否を問う表決にかけられるという制度である (生田・越野1997: 21-22)。カリフォルニア州法では州憲法の改正や修正のためには8%、法制の改正や修正のためには5%の選挙人の署名が必要と定められている。
- 2) 1995年提出のカリフォルニア公民権発議の原文は以下の通りである。

The state shall not discriminate against, or grant preferential treatment to, any individual or group on the basis of race, sex, color, ethnicity, or national origin in the operation of public employment, public education or public contracting.

引用文献

- 生田希保美・越野誠一
1997 『アメリカの直接参加・住民投票』自治体研究社
大塚秀之
1992 『現代アメリカ合衆国論』兵庫部落問題研究所
野口道彦
1996 「カリフォルニア大学におけるアファーマティブ論争」『同和問題研究』第18号、41-74。
山内久史
1998 「アファーマティブ・アクション判決の最近の動向」『帝国国際文化』第11号、189-213。
Chenoweth, Karin
1998 “Poll Confirms that Americans Want Diversity on Campuses”, in *Black Issues in Higher Education*. October 29.
Dervarics, Charles
1998 “U.S. Lawmakers Attack Florida Admissions Plan”, in *Black Issues in Higher Education*. December 9.
Flores, Linda and Alfred A. Slocum
1997 “Affirmative Action: A Path Towards Enlightenment”, in *Affirmative Action's Testament of Hope: Strategies for a new era in higher education*, edited by Mildred Garcia. Albany: State University of New York Press.
Gorman, Siobhan
1998 “The 4 Percent Solution”, in *National Journal*, March 20.
Howard, John R.
1997 “Affirmative Action in Historical Perspective”, in *Affirmative Action's Testament of Hope: Strategies for a new era in higher education*, edited by Mildred Garcia. Albany: State University of New York Press.
Hurtado, Sylvia and Christine Navia
1997 “Reconciling College Access and the Affirmative Action Debate”, in *Affirmative Action's Testament of Hope: Strategies for a new era in higher education*, edited by Mildred Garcia. Albany: State University of New York Press.
Irvine, Cohen
1998 “When the field if level”, in *Time*, July 5.

John, Eric St.

1999 “Taking the Initiative: In the wake of Washington State’s passage of Initiative 200, pro-affirmative action scholars call for a new combat strategy”, in *Black Issues in Higher Education*. November 26.

Los Angeles Times

1996 November 6.

Wilson, Julius W.

1999 “Affirming Opportunity” in *The American Prospect*. September-October.

Wood, James L. and Lorea T. Valenzuela

1996 “The Crisis in Higher Education”, in *California’s Social Problems*, edited by Charles F. Hohm. New York: Longman.

Zuckerman, Mortimer B.

1999 “Piling on the Preferences” in *US News & World Report*. June 28.

(付記) 本稿は1998年度京都文教大学人間学部海外学術調査奨励金による研究成果の1部である。

ABSTRACT

A Study of the Affirmative Action Program and Diversity
in American Higher Education

— The Approval of Proposition 209 in California —

Yuko TAKEUCHI

This paper attempts to discuss the arguments surrounding the Affirmative Action Program and Diversity in American higher education. The anti-Affirmative Action trend in the state of California led to the following decisions : the approval of the anti-immigrant Proposition 187 (1994), the University of California Regents' vote to end Affirmative Action at the University of California (1995), and Proposition 209 (1996), which concerns the end of discrimination and preferential treatment. As a result of these decisions many institutions were forced to "mend or end" Affirmative Action, and seek other ways to pursue the goal of racial diversity on campus.

This study describes the situation in the San Francisco Bay Area at the time of the campaign of Proposition 209 from some students' points of view and examines the strategies to achieve diversity in higher education. It concludes that the Affirmative Action Program has become unpopular as a means of achieving diversity ; however, new strategies have not worked out well.